

The Gallery voice

NO-53

編集・発行／画廊沖縄 〒901-1114 沖縄県南風原町神里 373 TEL / FAX(098) 888-6117 / 2013.1.18
Gallery Okinawa / 373 Kamizato Haebarucho Okinawa JAPAN www.galleryokinawa.com

談談笑笑 tantan-xiaoxiao

胡宮ゆきな

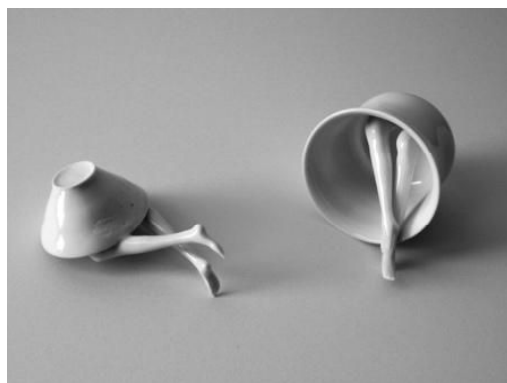
私は「目で感触を伝える」という事をテーマに作品を制作している。幼い頃、物がもつ様々な感触に興味があり、考えるより先にそれらに触れる事で指先にその感触を記憶させていった。また、現実には経験したことの無い感触も、頭の中の想像だけでつくりだしていた。その記憶の中の感触を視覚化させる事により、その感覚を再起させる。その行為を鑑賞者が作品に触らずとも視覚性だけで、各人がもつ記憶の中の感触を呼び覚ますことを意識している。何故なら人には未だに忘れられない、過去に覚えた感触の記憶があると思うからだ。

私は、父方の祖母が台湾人、祖父が中国人で幼い頃から沖縄に居ながらにして、台湾や中国の文化を感じながら生活してきた。祖父母とのコミュニケーションに共通の言語は不要であった。言語以外の「何か」で会話することが出来たからだ。私が作品とのコミュニケーションにこだわるのはそのことが大きく関係しているといえる。その「何か」で、作品を通して多くの人と繋がりたい。生まれ育った風土や文化に違いはあっても、作品を通した「言語」で人はもっと密に繋がる事が出来る。

日常の中に新たな価値観を創造する力は誰しもが持っている。その感覚に目覚め、一緒にこの世界を更に楽しく共有出来たらと思う。



「祝から祝へ」・2012年



「祝足の器」・2012年

日々はくるくる回って日常はぐるぐるつづく
その渦の中では好きも嫌いの境界も曖昧になり
オブラートの様な皮膜でできたラインたちは、べっと舐めるとたちまち霧のように消えて行く。

何かに染まる感覚と染められる感触

それはお布団のモフモフとした幸福感を伴いながら
スッがフワフワを攻撃する時

甘美なる憂鬱が

明るい卑猥観を語るだろう

ぶくぶく肥った思想達に

今日の私はせつせと餌をやり

明日の私はお水を与え

明後日の私とうんどうをしてから

明々後日の私の共犯者となる

(こみや・ゆきな／陶作家)

「猫型」の無意識とエロスと夢

本浜秀彦

世の中には、犬型と猫型の人間がいる、と言われる。犬型は組織や伝統に従順、猫型は自由気まま、などという大まかな類型化による区別だが、少なくとも芸術や工芸作品にも、犬型と猫型の作品があるようにわたしには思える。

新進気鋭の陶作家・胡宮ゆきな作品を、犬型と猫型のどちらかにあてはめるとしたら、それは間違いなく後者だ。

自由で、気ままで、奔放である。そして無意識的に媚びている。だが、決して「他者」に対して媚びているわけではない。それは時代の空気を深呼吸して吐かれた、今ここを生きる感性のフィルターを通して生み出された、時代に共鳴する媚びなのである。その道の権威めいたものに尻尾を振っていないモチーフや造形も、犬型ではなく、猫型であるゆえんだ。

しかし、実際の猫と彼女の作品が、決定的に異なる点がある。それは、毛むくじゃらの猫とは違って作品の肌触りが、どこまでも、つるつるてん、なのだ。そして、その色相は、白く青く、冷たい。

毛のない、つるつるてんの猫など、実際に目にしたら愛らしいとは思わないはずだ。でも、「サザエさん」のタマにしても、キティちゃんにしても、現実の触感をそぎ落とした猫のイメージでしかない。つまり、非現実は、表現を通して私たちには愛しい猫として認識されていることを思い出す必要がある。視覚と感覚と知覚の、間隙や盲点を突くかのように、さりげなく私たちの前に投げ出されている造形物一。胡宮作品の魅力は、まさにそこにある。

例えば「祝足の器」と名付けられた器のシリーズ。コーヒーカップのような器から、すっと伸びた二つの肢は、健康的な色気に溢れる。だが、そうした視覚的な快樂は、それを手に取って実際に容器として使おうとした際に、何ともいえない不便さに、いたずらっぽく逃げていく。

グロテスクな塊からはみ出し、それを支えている、複数の下肢が印象的な「呪から祝へ」の作品群にも、感覚の転換とも言えるようなつかみどころのなさがある。その場合は、視覚的な痛さが、瞬く間に快感に変わる。

そこはかたない落ち着きのなさも、また猫型の特徴だ。

猫が、幸せそうに眠る動物であるように、猫型の彼女の作品も、夢をモチーフにしたものが少なくない。大学卒業時や大学院修了時につくられた作品群は、思い出や夢を表現しているが、それぞれの作品は、この表現者の強いメッセージを含んだ、強力な物語としてまとまてはいない。断片が断片としてわたしたちの前に示されているだけだ。こうした感覚は、まさに今の時代を象徴している。それゆえ、ひとつひとつそれらを拾って積み上げていかなくてはならない難儀さを伴っているが、そうした折り合いを付けられるかどうかまで、「個」に委ねられている。まるで群れない猫のような徹底的な「個」が求められているように。

そうした「個」＝「私」をつきつめると、どうなるのか。

極端に言うと、地球上に生きるいのちは、細胞というユニットに細分化されていくはずだ。

胡宮の作品に、アメーバーのような単細胞や細胞の胞子が、グロテスクに、そしてエロチックにイメージされているのは、そうしたものからくるのだろうか——その問いへの判断を、初の個展とともに忽然と現れた新しい表現者の、これまでに制作された作品をもとだけに、拙速に下すことはできない。

ただ、つるつるてんの肌触りへのこだわりが、彼女のルーツにつながる台湾／中国の豊かな陶磁器文化を、無意識的、意識的に追っていることに関係しているのだとしたら、猫のように、寝ている時間と起きている時間のバランスを不安定にし、現実との境界を曖昧にしたまま、夢をもう少し探り続けるのかもしれない。

そうした夢を見終えた時こそ、ホンモノの彼女が立ち現われるはずだ。そして、その時に今の作品のコンセプトを再び選び直すことも、また正しい選択である。

(もとはま・ひでひこ／ 沖縄キリスト教大学院大学教授)

YUKINA KOMIYA



1987 年生まれ

2012 年 沖縄県立芸術大学大学院 陶磁器専修 修了

■ 展覧会歴

2011 年 「陶磁器専修 4 人展 沖山愛奈」

(沖縄県立博物館・美術館 県民ギャラリー 1)

「泥土会展」(リウボウ美術サロン)

「小さな大作展」(高光ギャラリー)

2012 年 「THE GRACE 工芸展」(スクエア泡瀬)

2013 年 「新春をデザイン陶六人展」(リウボウ美術サロン)

■ 参加中の展示

2012 年 11 月 15 日～2013 年 2 月 24 日

「東亞當代陶藝交流展」、新北市立鶯歌陶瓷博物館 (台湾)

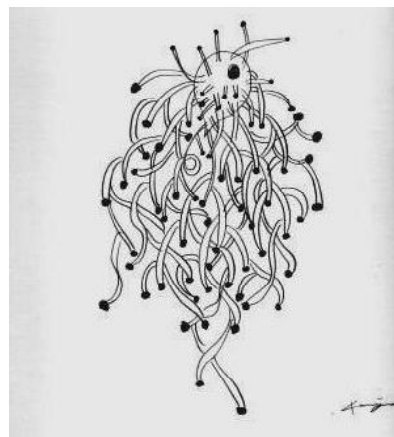
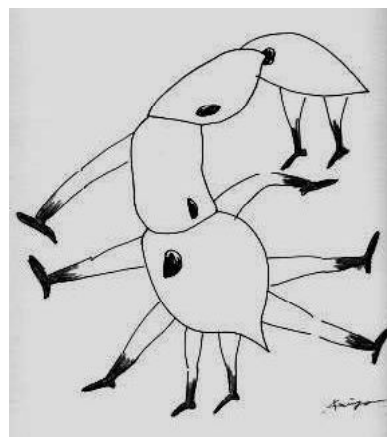
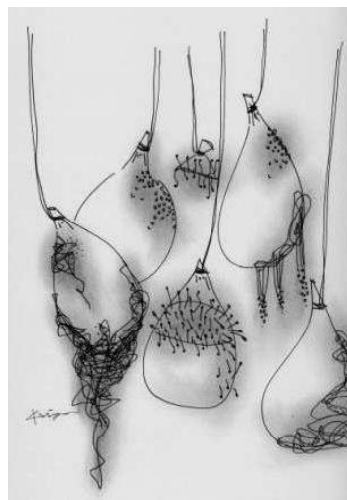
■ 受賞歴

2010 年 ART MEETS ARCHITECTURE

COMPETITION(AAC)2010 入選

2011 年 りゅうせき創立 60 周年記念事業

「継ぐものたち」展 入賞

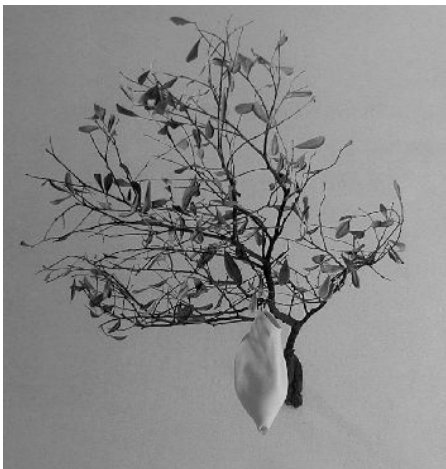


胡宮ゆきなとその作品たち

田原美野

■有機的な無機物

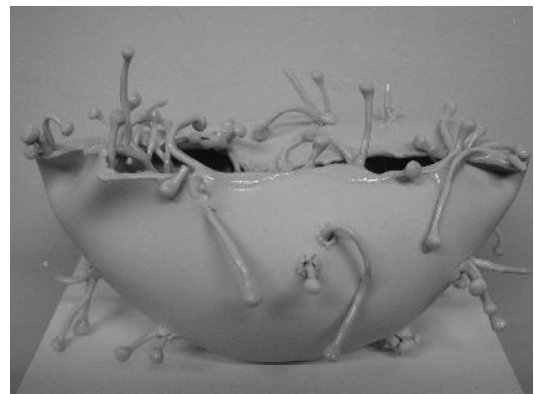
胡宮ゆきな作品を初めて目にしたのは、2012年の県立芸大・卒業修了展だった。灰色のコンクリート壁から突き出た木の枝には、白いつるつるした質感の、サナギのようなものが垂れ下がっている。近づいてみると、薄暗い照明に照らされ、その先端部には、滴り落ちるしずくのようなものがキラキラと光っていた。「ようなもの」とは、そうとしか表現できないからだ。どこかで出会ったことがあるような「生き物」。それは、枝の先で、呼吸し、成長し続けているかのように生き活きと、しかし静かに佇んでいた。無機質なコンクリートの壁からでた枝に、有機的な物体をつり下げる。作家の意図するところを知りたくなり、会場で声をかけた。作品についてハキハキと説明する彼女に、驚いた。静かに、ボソボソと、声を絞り出すように話す作家像を、私が勝手にイメージしていたからだ。作品とそれを作る作家本人のイメージの違いに戸惑いながら、もっと彼女の事を知りたいと思うようになった。これが胡宮ゆきな作品との最初の出会いだ。



「愛惜」2012年

■感覚のコミュニケーション

胡宮作品のおもしろさの一つは、その奇妙なカタチである。2008年に制作された「口」(Mouth)では、貝のような形状の物体から、触角や触手、卵のようなモノがあふれ出ている。その発想は、梱包材料である発泡スチロールのつぶつぶだそうだが、その後、粘菌の存在を知り、イメージが膨らむ。幼い頃にみた夢の感触から、「憂鬱」を制作。それは摩訶不思議な、幻の世界に生息する生き物のようだ。「目だけで感触を伝え、作品をみた人それぞれが持つ記憶を想起させたい。」彼女のチャレンジの一つだ。硬く、冷たい素材でできているはずのものが、柔らかく、温度や湿度を感じられるものに見える瞬間が好きだという。そのイメージをカタチにする上で、胡宮は素材に貪欲である。土と土の接続に針金を使ったり、ガラスを組み合わせたり。布に針を刺し、線を刺繍する。自らの忘れたくない大切な記憶や感触をたぐり寄せ、イメージの世界を自らの足で散歩する。帰ってきたら手を動かしカタチにする。作品を作ることが楽しいという胡宮にとって、それは他者とのコミュニケーションのツールともなっている。胡宮自身が今後、どんなイメージの世界を散策し、様々な素材や手段を使って、どのようにカタチにするのか、楽しみにしたいと思う。



「憂鬱」2009年

(たはら・みの／画廊沖縄スタッフ)